

## 中国旅行記 小樽日中友好協会の仲間と共に

佐藤 幸子

小樽日中友好協会では昨年10月19日から23日まで中国・山東省青島（チンタオ）市を訪問した。日本政府が尖閣諸島を国有化したことに抗議する反日デモが中国国内で非常に活発化した時であった。テレビでは青島のイオンなどの日本スーパーが激しい襲撃にあっているのを見た。みんなはこんな時によくぞという目で見ていたらしいが、こんな時にこそ行かなければと考え、また青島側からもこんな状況だからこそ交流を深めたいとの要望を受け、予定通り訪問することにした。8名の予定が直前に6名になったが、われわれは意気揚々と出かけた。多分楽しい旅になるであろうとは思っていたが、これほど素晴らしいものになるとは思っていなかった。友のためには命をも懸けるという言葉をしみじみと感じたことであった。北海道新聞には大きく取り上げられた。それはこの旅行のことを言うつもりはまったくなく、丁度私が老荘大学の運営委員をしており、その記事のことで記者の質問を受けていた時、偶然のことから中国旅行のことが分かったという次第であった。

ところで、2010年小樽市民合唱祭に青島市音楽家協会合唱団を招待したのが交流のきっかけだった。当会が設立1周年を記念して小樽合唱連盟と協力して青島市から音楽家協会合唱団23名を11月6日から10日までの5日間招聘し、小樽や旭川で音楽交流をした。7日に市民会館で開催される第111回小樽市民合唱祭に出演するほか、養護老人ホーム小樽育成院で慰問合唱や旭川混声合唱団と合唱交流をした。

会長の私は最後まで渋っていた。かなり予算を必要とするこの行事が成功するとは思われなかった。しかし、経費は約120万円の予算で、北海道の平成22年度地域作り総合交付金を後志総合振興局に申請して40万の内示を受けた。そのほか中国側負担と会員の支援で資金のめどは立った。後で、もし会長が率先して動いたら、このことは成功しなかったかもしれない。会長がなかなか賛成しなかったのも、それがみんなをたぎつけたのかもしれないという会員たちの意見であった。

青島市音楽家協会合唱団は、1999年に創立され、現在団員は40名余である。団員の多くは教育、政府機関、金融、企業管理などの仕事に携わり、芸術専門の学校を卒業している。創立2年目の2000年には北京で開催された第5回中国国際合唱節で金賞を獲得したり、中国全国レベルの音楽コンクールで大きな成果を挙げている。また、海外とは韓国に2度交流出演し、また青島市に來訪した米、仏、独、台湾などの合唱団との交流合唱など国際的な経験を重ねている。

青島市は中国山東省に属し、人口756万人（2007年）の産業都市である。山東半島南部に位置し、日新戦争後にドイツが三国干渉により1892年から1922年まで租借地として軍港を建設し、町並みや街路樹、上下水道などが整えられ、青島ビールなどドイツの影響が残っている。気候は

夏の平均23～24度（7月）、冬はマイナス0～1度と小樽（夏20～21度、冬マイナス4～5度）よりやや暖かいようである。

2010年以来青島側から何度も招待されたが、なかなか実現に至らなかった。今年ようやく実現の運びとなったが、そこへこの問題がおきた。多分、それほど心配することはないと私は思っていた。既述のように北海道新聞から突然お電話があって、取材させてほしいとのことだった。

「反日」渦巻くこんな時こそ…という見出しは、かなり世間を驚かしたらしい。でも新聞社にきた反応は好意的なものだった。こんな時だからこそ行くべきだというのが世間の反応だった。日本のテレビに写った暴動は臨港地区の振興開発地での出来事で大半の街中は平穏で親日的だった。あばれた人々は世界の各地から集まった沖仲士であって土地の人ではないとのことであった、しかも彼らはしばし暴れた後、捕えられて牢に入れられたとのことで、中国政府は煽ったり鎮めたり、忙しいことだ。

一行は会長のほか秋野治郎副会長、理事の寺山ユリヤ、事務局次長の藤原清美、会長の工藤和宣、堀内敬三の6名であった。

10月19日、小樽を出発、その日青島空港到着、一人一人に花束で迎えてくれた。車のなかでかけていた歌は、どこかで聞いた声だと思ったら、なんと日本に来た団員の一人が作ったテープであった。

すぐ市役所内に青島人民対外友好協会を訪問し会長の李堂さんにお会いした。その後、オリンピックヨット公園を見学した。

その夜の歓迎晩餐会には約40人の人が出席してくれ、再会を喜んだ。青島新聞の総編集長や青島博物館の館長、弁護士、税関職員、音楽大学教授や講師など多士済々の皆さんが出席してくれた。中国でもトップクラスである合唱団の美しい歌声で会の最後を締めくくってくれた。

10月20日、青島小魚山公園（青島日本中学校旧跡）、ドイツ総督府旧跡、カトリック教会堂、花石楼、つまり蔣介石公館（ここは映画の撮影が行われていて見学できなかった）、日本領事館旧跡、青島ビール博物館などを見る。結婚式の服装をした人たちがにぎやかな音楽の中撮影会を楽しんでいた。よくよく見たらその音楽を演奏している人たちはおばさんたちであった。お昼は大きく賑やかなところで、舞台があって昼間から歌や踊りを見せて客を楽しませてくれるところであった。でも、私たちは2階の離れた静かなお部屋を取ってくれて、おいしい料理を楽しむことができた。昼食の後の海上遊覧は気持ちの良いものであった。

海の女神宮というところに行ったが、そこは人が海に出かける前と戻った後に、祈りを捧げにくるところであった。

青島ビール博物館は本当に楽しいところであった。その床はさまざまな角度で斜めになっていて揺れてはいないのだけれど、酔っ払ったと同じ状態になるのだ。その状態がカメラで外に写しだされるのだ。これは本当におかしかった。みんなは大いに笑った。

その夜はカラオケ親睦会であった。立派なカラオケルームに案内された。日本の懐かしい有名な歌はほとんど中国語に訳されていた。「ふるさと」「北国の春」など互いに日中の言葉を織り交ぜた美声の競演となった。

10月21日、「蓬莱」を次の日見る予定であった。「蓬莱」はその名の日本舞踊を習っていたので大いに楽しみにしていたが、そこはあまりに遠いので予定を変更してランヤータイへ行った。道

教の発祥地「労山」までずいぶんいろいろな乗り物を乗り換えていった。そこで銀杏がいかに生命力の強い植物であるかを痛烈に知ることができた。帰り青島博物館に寄ってたくさんものを見た。館長自らドイツと日本の占領の歴史などを語ってくれた。反日教育の強いイメージを日本では想像していたが、展示物を含め非常に抑制されていて、われわれの見た展示物は奥様（彼女も館員である）が心を込めて展示したものだと言われた。そのあと青島彫塑園によった。公園のようなところに沢山の小さな彫刻がおかれてあって、非常に興味深いものであった。

10月22日、秦の始皇帝博物館を訪れた。彼が指差した方角が丁度日本だったとのこと。そこで、大臣の徐福に日本にいて不老長寿の薬を持って来るようにと命じた。実際、徐福は日本に来て彼の墓が和歌山にあるそうだ。

夜は歓送晩餐会であった。旅行社からは和服など着ないようにと言われた。私はパーティが始まる前にも聞いたが返事が無く、何度も聞くのはばかられ、ろくに練習をしていない踊りを披露する羽目になった。演目は彼らが一番よく知っている「さくら」と初めて見る古典的な踊りである「えび」であった。「えび」の最後のお辞儀で終わるしぐさが感銘を与えたく、大いに喜んでくれた。

10月23日、見送り餃子を食べ青島空港にむかった。途中、イオンに寄って、買物をした。イオンの店は贅沢で高級なものを売っていて、日本とまったく変わらない素晴らしいものばかりであった。

2年前政府から許可が得られず訪日を果たせなかった青島新聞の姜総編集長が、5日間つきっきりで私たちを案内してくれた。こんなに良くしていただけるほど私たちは接待していたかしらと思いついて返している内、いつしか涙があふれていた。彼らが来日した2年前も漁船事件で緊迫していた時期だった。改めてこういう時期だからこそ市民の草の根交流の必要を、強く感じた旅であった。

帰ってきてから北海道新聞の「まど」に旅の思い出を書かせていただいた。今後もいつでも何度でも来るように、いつでも歓迎いたしますという嬉しいお言葉をいただいた。

いつも思っていることだが、理事会メンバーも会員たちも、どうしてこんなに良い人達が集ったのだろう。そういう人達との旅は本当に楽しいものだった。なにひとつ困ったこともおこらなく無事小樽に帰ってきた。そして海陽亭で報告会を終えることができたのである。